

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

緩やかな稜線を北東に延ばす五葉山。頂上部からは、東にリアス式海岸を、西に北上山系の山々を望むことができる。巨岩が折り重なるように堆積している黒岩は、遠くから見ると折れ線で繋がれたグラフィックのような独特の形を描いている。

その稜線を病室から見ることになるとは思いもよらなかった。一九九六年十月十九日夕刻、職場同士の懇親試合ソフトボールで一塁に走り抜けた直後に不整脈と胸に圧迫感を感じ、試合終了後の懇親会途中で帰宅。脈を取っていた妻にせがされるように住田病院へ。

住田病院では「循環器科のある大船渡病院へ紹介したい」と大船渡消防署住田分署の救急車が要請される。大船渡病院で、左手首に冷たい注射液が入れられたとたんに体全体が熱くなり、口が濁きだした。当直の若い女の先生の顔に不安な表情が浮かんでいる。電話で循環器の先生を探しているようだ。

やがて循環器の専門医が到着し、ベッドのまま集中治療室に運ばれ、あわただしく心電図のモニターが設置される。酸素吸入開始。これまでの経過について無駄のない問い。緊張が室内を支配し

ている。午前三時、全身と問わず声が出そうにならな。麻酔の後、電気ショック療法が行われた。どのくらいの時間が経ったのだろうか。カーテン越しに外の明るさが部屋に届く。尿意を催す。思えば昨夜自宅を出てか

きた人々とともに積み重ねてきた時間と音響が美現の源だった。自然観察会や森林浴、五葉山登山、五葉山麓森林公園の整備。その一つひとつに出会いがあり、交わりがあった。

一人ひとりが、病室の白い天井に思い浮かんだ。吉田繁先生、紺野寿美さん、伊藤悦治さん、紺野

病室から望む稜線

住田町上有住 千葉 修 悦

らトイレに行っていない。水瓶で用を足すと、腿にそのぬくもりが伝わってきた。それは「生き続けている」という体の営みであった。

朝の五時だと妻は言う。静かに首を窓側にまわしてみる。遙か遠く緩やかな稜線が薄紫色を帯びて横たわっている。どこかで見たような山並みである。「あっ五葉山だ」

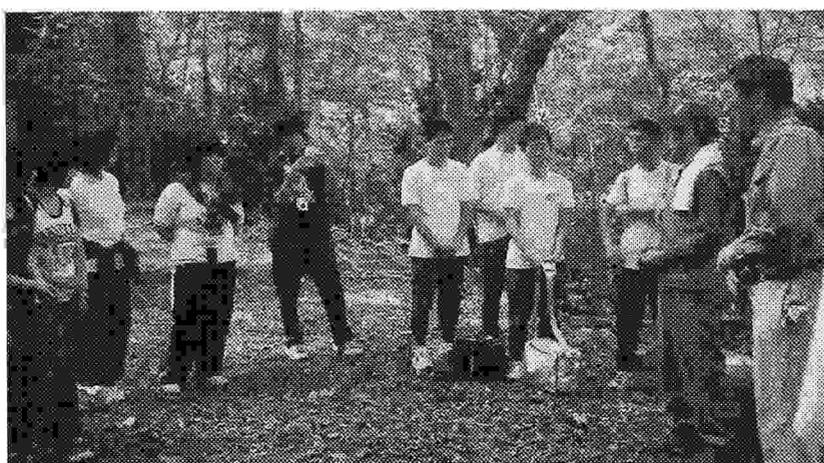
木々の深緑、新鮮な空気、神秘的な沢の水音。一九八一年初夏、初めて見る五葉山麓は「いつかきつこの森をみんな歩いてみたい。この森に抱かれていたい」そう思わせるほどの力を発していた。

思いは十年後に「五葉山森林浴まるごと体験」として結実した。熱い眼差しでこの森を見つけて



突然死の危機に直面し、五葉山を介し多くの人たちとの出会いが胸奥深く刻まれていることを知った。

人は強いようで弱へ、遅いようでも早く、お互いに足りないところを



「住田高校地域文化選択講座」で五葉山麓を紺野寿美さんとともに案内(右から2人目が紺野さん、右端が筆者)＝2008年9月19日、五葉山麓森林公園「ブナの広場」